MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース

CONTENTS

01 表紙・目次
02 展示報告
「HOTTA ー『払田柵跡』発掘半世紀ー」
03 展示報告
「勝平得之ー得之・秋田への想いー」
04 展示報告
「大こうぶつ展ー鉱物を楽しむ5つのメニューー」
05 わくわくたんけん室レポート
06 学芸ノート（考古部門）
07 学芸ノート（地質部門）
08 令和６年度の展示スケジュール

新着収蔵資料紹介

鉱石花瓶

鉱石花瓶は鉄製の筒に鉱山で採掘された様々な鉱物をセメントで貼り付けて制作したもので、主に尾去沢鉱山の鉱夫たちの間で流行しました。水晶が多く産する地域では、しばしば水晶とセメントで置物を作る例がありますが、花瓶を制作する例は少なく尾去沢鉱山の特徴ともいえます。

この鉱石花瓶には、透明度の高い水晶や色の濃い紫水晶、形の良い黄鉄鉱がふんだんに用いられています。秋田県の鉱山文化の一端を垣間見ることのできる貴重な資料です。

（高さ３０cm、最大径１８.５cm）

NO.178

企画展

HOTTA

ほったのさくあと

「払田柵跡」発掘半世紀

主催　秋田県教育委員会
後援　秋田市、大仙市、横手市教育委員会、美郷町教育委員会
協力　雄勝城・駅家研究会

払田柵は、明治 35 年（1902）に埋もれ木が発掘されたことによって存在が明らかとなり、昭和５年（1930）の高梨村（現大仙市）と文部省の発掘調査成果を受け、翌 6 年に秋田県初の国指定史跡となりました。

歴史書に該当する記述が無いことから「無名不文の遺跡」と評されていた払田柵跡について、秋田県教育委員会では昭和 49 年（1974）に払田柵跡調査事務所を開設し、調査・研究を進めてきました。

今回の展示では、半世紀に及ぶ払田柵跡調査事務所による発掘調査の成果や関連する研究をとりまとめて、払田柵跡の成り立ちや移り変わり、その性格に関する様々な学説、最新の発掘情報等を紹介しました。

10 月 14 日（土）には国立歴史民俗博物館教授・三上喜孝氏を講師に、「出土文字資料から見た払田柵跡」と題し講演会を開催しました。

来館者からは、「払田柵の名前は知っていたが詳しいことは分からなかったので勉強になった」、「今後の調査が楽しみ」、「パンフの充実ぶりに感心した」、「払田柵の全体像がよく分かった」などの声をいただきました。

●展示構成

序　章　払田柵跡のアウトライン
第１章　払田柵跡の発見
第２章　払田柵跡の変遷
第３章　研究者は語る－払田柵跡を巡る学説史－
第４章　払田柵跡を巡る遺跡群
第５章　払田柵とはなにか
終　章　払田柵跡のその後と現在、そして未来へ

外柵南門復元模型

年輪年代測定により伐採年が西暦 801 年（西暦 801 年の冬から 802 年の早春まで）と判明し、柵の建設年代の手がかりとなった柵木

外柵・外郭の間を流れる川に架かっていた橋（推定全長 17m）の橋脚。全長 2.6m、直径約 60 ㎝。

（展示・資料班：新堀　道生）

秋田の先覚記念室　企画コーナー展

勝平得之

秋田に生き秋田を描く

― 得之・秋田への想い ―

●展示概要

［秋田風俗十態「いろり」］1957 年 (館蔵)

紙漉き職人の家に生まれ、父が苦労して漉いた紙が使い終わると捨てられてしまうことを残念に思い版画家を志した勝平得之。しかし、中央で美術を勉強することは叶わず、独学で「自画･自刻･自摺」の創作方法を見出した画業は不安と孤独との闘いであったといえるでしょう。得之の画業を支えたものとして次の三つを柱に展示構成しました。一つ目は、「美術の勉強をしていない者でも美術作品を制作していい」と背中を押してくれた農民美術運動との出会い、二つ目は、秋田の風土の魅力を再発見する機会となった建築家ブルーノ･タウトの案内、そして三つ目が得之が築いた地元ならではのネットワーク。パネル 16 枚と資料 60 点を展示し、初期の作品と晩年の作品を比較したり関連づけたりしながら得之が版画作品に込めた秋田への想いをたどれるようにしました。

●展示構成

第１章　版画家の道への助走
第２章　得之を導く農民美術運動
第３章　二足のわらじを履く
第４章　版画家勝平得之誕生
第５章　地元秋田から世界へ
第６章　地元のネットワーク
第７章　版画に込めた想い

秋田魁新報に投稿した
初期の頃の作品一覧パネル
（1914 年～ 1928 年）

［秋田民俗繪詞「サンペ」］ の再現

●展示を終えて

先覚記念室入り口に［秋田民俗繪詞「サンペ」］をわらで再現したものを展示しました。製作は、当館のボランティアわらチームに依頼しました。得之の作品と同様にどこか懐かしく、優しい気持ちになれると好評でした。ギャラリートークを４回、団体客向けの解説も３回行いました。農民美術運動や田口秋魚との書簡の内容など、これまで知らなかったことを聞けて有意義だったという感想をいただくことができました。また、展示期間中は、本展示を目的に来館する方も多く見られました。

今回の展示を観覧された方から、調査研究に役立ててほしいと、50 年近くに渡って収集した資料 86 件を寄贈して頂くことができました。寄贈資料の中には、「徳治」という本名の銘がある肉筆画や詳細にスケッチして描かれた秋田風俗の版画作品も含まれており、今後の研究や企画展示に大いに活用できるものと考えます。

最後に本展の開催にあたり資料借用等をご快諾いただいた皆様へ、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

（秋田の先覚記念室：齋藤　知佳子）

秋田県民歌に「地下なる鉱脈　無限の宝庫」とうたわれたように、秋田県はかつて日本有数の鉱山県でした。現在それらはすべて閉山していますが、当館には県内鉱山産の鉱物標本が数多く収蔵されています。この企画展では、それら秋田県産の鉱物と、日本や世界の鉱物を多数展示し、鉱物の魅力を５つのメニューで紹介しました。鉱物が大好物！と言うスタッフが、子どもから大人まで興味を引きつける鉱物を集めた企画展です。

●展示構成

メニュー1　美しい結晶の世界

鉱物の魅力を感じてもらえるような、大きくて美しい鉱物結晶を展示。

メニュー2　鉱物を知る

鉱物の形や色、化学組成や産地など、代表的な標本を展示して、鉱物ってなに？に答えるコーナー。

メニュー3　秋田の鉱山（たからのやま）

鉱山は金・銀・銅などを含む鉱石や美しく貴重な鉱物を産する、まさに「たからのやま」。
そのなりたちを紹介し、秋田県産の鉱石・鉱物をたくさん展示。

メニュー4　金属（メタル）アラカルト

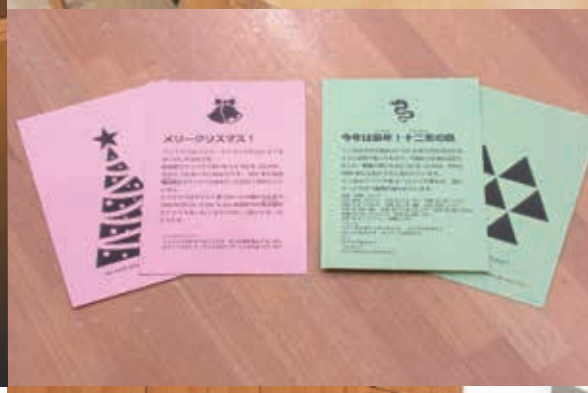
私たちの生活になくてはならない金属について、金属を含む鉱物と、その金属を用いた製品と利用方法、リサイクルなどを紹介。

メニュー5　宝石とその原石

誕生石として知られる宝石を、原石とともに紹介。
石英、めのう、オパールのコーナーもあります。

（地質部門：渡部　均）

わくわくたんけん室レポート



変わりつつある「ハンズオン」

博物館では新型コロナのパンデミックにより非接触型展示を余儀なくされてきました。ことに「ハンズオン」という接触型体験学習を主軸としたわくわくたんけん室は閉室や体験メニューの撤去など大きな制約を受けました。昨年度からこうした実情を鑑みて改善に努め、新しい「ハンズオン」のあり方と可能性を探っています。これまでの宝箱（体験教具を入れてある箱）や工作メニュー（塗り絵、折り紙など）を省察し、より博物館、秋田県の歴史、民俗、自然に関心を寄せていただけるよう試行してきました。

宝箱が収められていた周囲の棚を展示ブースととらえ、現在は生物、地質、歴史、考古、民俗、工芸各部門へのアプローチとなる体験型展示を行っています。展示は常設ではなく、不定期で展示替えを行います。今のところ、旧宝箱のアイテムで人気があったもの、取り組みやすいものを活用しています。

民俗部門展示の「昔のおもちゃ」「昔の道具」は来場者が必ず立ち止まるコーナーです。子どもから大人まで、親しみやすいアイテムではありましたが、重たいコンテナボックスから解放し、手に取りやすくしたため手軽に体験できるようになったからだと思われます。

展示内容は旧展示をリニューアルしたものです。各部門のキャプションのデザインを一新し、色分けして掲示してあります。今後、新しい視野と企画を盛り込んで展開して行けるよう努めたいと考えています。

工作メニューには「このままでいい」「変更すべきだ」という賛否両論があり、毎日提供しているアイテムの内容に大きな変化は今のところありません。わくわくたんけん室が「工作室」「託児室」でもあるという認識も依然あるのです。

ただ時季に合わせたスペシャルプログラムはできるかぎり博物館、秋田県、企画展の内容に関連付けられるよう見直して実施してきました。秋田の伝統工芸に関わる「刺し子のコースター作り」、企画展に合わせた「天然石のチャーム作り」は人気がありました。秋田犬、辰などをアイロンビーズで作る際には、解説を添えたグリーティングカードを制作し、提供する意味、取り組む意義を明示するように心がけています。

懸案だったわくわくたんけん室のリニューアルが始まりました。みなさんが博物館を楽しんで、新たな学びにつながるように努めていますので、ご来館の折りにはぜひお立ち寄りください。

（学習振興班：山本　丈志）

写真上から
「昔のおもちゃの展示コーナー」
「SP・日本画の絵の具で絵手紙を描こう」
「SP・アイロンビーズのグリーティングカード」
「考古・工芸部門などの展示コーナー」
「自然部門の展示コーナー」

深澤多市と払田柵跡関連史料

深澤多市

深澤多市は、『秋田叢書』『秋田叢書別集菅江真澄集』等を刊行するなど秋田の歴史研究に大きな足跡を残した人物です。払田柵跡が 1931 年（昭和６年）３月に国の史跡に指定された当時には、深澤は秋田県史蹟名勝天然記念物調査員であり、文部省と高梨村との連絡調整に務めました。また、秋田考古会の幹事として、『秋田考古会誌　払田柵跡号』を発行するという大きな役割を果たしました。その深澤に関わる新史料の中から３点紹介します。

１点目は後藤宙外の書簡です。払田柵跡を発見・研究した後藤の書簡の中に払田柵跡の年代について述べたものがあります。後藤は次のように深澤に報告しています。「払田柵跡の年代は奈良時代末期から平安時代初期である。根拠は柵の構造や出土品、特に布目瓦である。柵についての秋田魁紙の切り抜きを東京在住の考古学や史学の知人に送り意見を求めたが、年代については疑問をもつ人は誰もいなかった。文献の中の何柵かが問題だという人だけだった。年代については考古学者や歴史学者より、むしろ物質科学方面から解決できるかもしれないと思える。その後、思った通りの報告があった。東北大学理学部の鑑定によると、柵木は土中埋没後 1000 年以上経過しているものであった。柵は平安時代初期頃から（時代は）降らない結果になった。」（筆者要約）払田柵跡の年代について様々な方法を使って解明したいという後藤の熱意が伝わってきます。

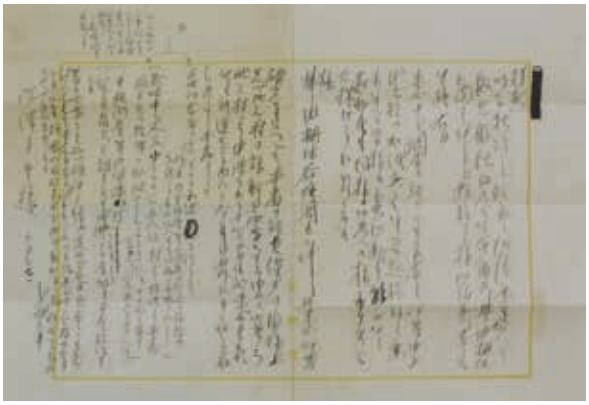
２点目は、文部省の嘱託として払田柵跡発掘調査に携わった上田三平の書簡です。昭和５年９月 27 日付の書簡では、「払田柵跡の発掘についてはまだ確定していないとはいえ、文部省は経費が少ない。そこで村より調査員の派遣を申請するとよいのだが、書類もまだ届いていないため今年はどうなるか分からないとみている。文部省としては、土地所有者や小作人の承諾を得ること、村で人足を出すことなど５つの条件を定めておかなければ出発しても不可能である。また、文部省では調査員１人だけの出張費は負担するつもりである。」（筆者要約）という内容が示されています。つまり、５つの条件を受け入れた上、発掘の経費を村で負担すると申請するならば、調査してもよいという当時の文部省の姿勢を示した史料です。

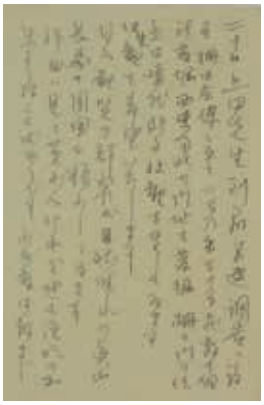
３点目は原文を引用します。「二十日上田先生到着　早速調査ニ着手　柵は全線ニ亘り二間乃至三十間宛（づつ）数十個所発堀　西東南北の門址を発掘　柵と門の位置は瞭然　頗る壮観を呈してゐます　御来観を希望いたします　日々観覧の群衆が秋晴れの眞山長森の周囲を賑わしてゐます（後略）」これは、高梨村の調査員だった藤井東市の書簡です。文部省の上田三平が来村してからの発掘の状況について簡潔に表現されています。実際にその場面を見た人にしか書けない内容です。

払田柵跡の発見から発掘調査当時の様子が、臨場感をもって伝わってきます。これらのような史料にふれたとき、調査の醍醐味を味わうことができます。

（考古部門：渡部　猛）

後藤宙外書簡


上田三平書簡


藤井東市書簡

秋田の鉱山と鉱石

秋田の鉱山とその情報

秋田県には記録の残っているものだけで 200 を超える金属鉱山が存在します。そして、この数字は全国的に見ても非常に多く面積当たりの鉱山数は全国でも 1、2 を争います。また鉱山とは別に、鉱物の標本の採取できる場所を鉱物産地といいますが、このような場所も秋田県内には多数あります。鉱山の情報は様々な文献に記載されており、大きな鉱山であれば詳細に知ることができます。また、明治以降に操業していた鉱山であれば小さな鉱山でも採掘対象の金属種を知ることができます。しかし採掘していた鉱石の産状が記載された鉱山となると極めて数が少なくなります。つまり、鉱山の情報を残すためには、その鉱山で産した鉱石を入手し保管していくことが必要となります。

秋田の全金属鉱山のうち、現在当館で鉱石や鉱物の標本を保管しているのは約 40 か所と 5 分の 1 程度です。もちろんこの 40 鉱山という数字は少ないわけではありません。展示に適した大きく質の良い標本や、現在では入手が極めて困難な標本も多くあり、バックヤードに置いておくのがもったいなく感じるものも多々存在します。当館の鉱石・鉱物の展示は充実していますが、より広範に標本を収集し後世に残していくことも使命の一つです。

秋田県は鉱山県ですが、当館で標本を所持していない鉱山が残り 160 ほどあるわけです。秋田県で最後の鉱山（餌釣、松峰）が閉山して早 30 年となり、多くの鉱山は閉山して 50 年を超えます。新たに標本を入手するためには現地に赴き採取を行う必要がありますが、多くの鉱山跡は現在自然に帰っており、道がなくなるなど到達困難な場所も増え始めています。鉱石標本の採取は当館にとって急務と言えるでしょう。

鉱石の標本と鉱山の全容

鉱石といってもその産状は多岐にわたります。一つの小さな鉱山でも様々な鉱石を産する場合があります。例えば、鉱石の採掘量が 7000t 程度（25m プール 4 杯分）と極めて規模の小さい水沢鉱山では、珪鉱や黄鉱、黒鉱、重晶石鉱、礫状鉱など多様な産状の鉱石が産しました。

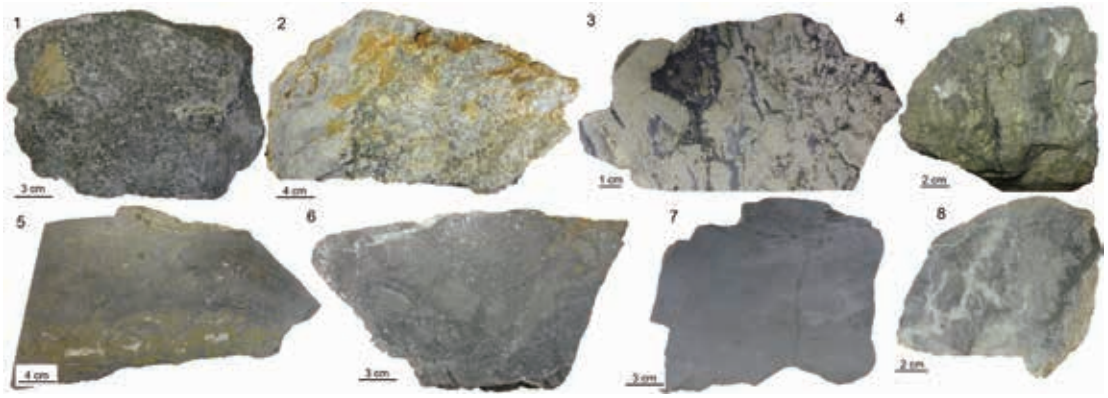


写真 1　珪鉱　　流紋岩を母岩として、方鉛鉱、閃亜鉛鉱が鉱染した鉱石。
写真 2　珪鉱　　凝灰岩を母岩として、方鉛鉱、閃亜鉛鉱が鉱染した鉱石。
写真 3　礫状黄鉱　泥岩の挟みを有し、全体として礫状の黄鉱。礫間には方鉛鉱、閃亜鉛鉱、自然金が晶出している。
写真 4　塊状黄鉱　黄銅鉱に富む塊状の黄鉱であり、泥岩片を含む。
写真 5　半黒鉱　　黄鉄鉱、黄銅鉱、閃亜鉛鉱、方鉛鉱からなり空隙中に重晶石が晶出している。
写真 6　礫状黒鉱　黒鉱礫、半黒鉱礫、黄鉱礫を含み、全体として凝灰質な鉱石。
写真 7　層状黒鉱　葉理が発達し閃亜鉛鉱、方鉛鉱を主とする。また、雑銀鉱及び含銀四面銅鉱、自然金に富み、しばしば 1mm 程度の自然金を含む。
写真 8　重晶石鉱　重晶石を主とし、スメクタイト及び黄鉄鉱を伴う。

これら 8 点は水沢鉱山のズリ（採掘時に出た残土）などで最もよく見られる鉱石であり、鉱石を観察するとさらに細分化することができます。一つの鉱石をもって「この鉱山はこのような鉱山だ」と言うことはできず、「この鉱山ではこのような鉱石が産した」ということまでしか言えません。例えば写真 1 や 2 の鉱石のみを見た場合、水沢鉱山が黒鉱鉱床なのか、鉱脈型鉱床なのか判断することはできません。鉱山の全容を知るには、なるべく多くの鉱石を採取し、産状の記載を行う必要があります。

秋田県に数多くある鉱山ですが、それらの地質学的な情報を得るため、地道に調査を行い後世に残していくことが、重要であると私は考えています。

（地質部門：鈴木　照洋）

2024 Exhibition Schedule

令和6年度

秋田県立博物館 展示スケジュール

企画展示室（2F）

企画展

美の交差点
博覧会とあきたの工芸

4月27日(土)～6月30日(日)

明治期の万国博覧会に出品された秋田の工芸品は欧米の人々に好評を博し、数々の賞を受賞しました。秋田の工芸と博覧会が織りなした変化や、今まで知られてこなかった歴史、新たな魅力について、美しい工芸品とともに紹介します。

特別展

世界の昆虫展

7月20日(土)～8月25日(日)

世界各地の昆虫を豊富な標本で紹介し、体のしくみ、人間との関わりなど、さまざまな角度から昆虫を学ぶ展示です。世界にあふれる昆虫の多様性には驚くばかり。
自然の面白さ、不思議さをぜひその目でお確かめください。

企画展

稲穂の詩（うた）～秋田と米づくり～

9月28日(土)～12月1日(日)

秋田の生活や文化、経済の発展に大きな影響を与えてきた米。歴史資料と昔の農具、栽培技術の変遷と先人の努力の足跡を辿りながら、秋田の米づくりを見つめ直します。米利用の最近の動向もあわせて紹介します。

企画展

秋田の宝 県指定文化財展

令和7年2月15日(土)～4月6日(日)

秋田の人びとが守り伝えてきた絵画、工芸品、考古・歴史資料。秋田には地域の記憶をものがたる宝物がたくさんあります。地元の宝を知れば、地元に暮らす楽しみも増えます。展示室でゆっくり文化財を眺めて、地域の価値を見直してみませんか。

コーナー展

ふるさとまつり広場（2F）

- 子どもの成長を願う～鹿島船～
  4月25日(木)～6月18日(火)
- 夏のまつり～七夕絵どうろう～
  7月4日(木)～8月30日(金)
- ハレの日～年祝い～
  10月3日(木)～11月19日(火)
- 七福神
  12月5日(木)～令和7年2月4日(火)
- 春の訪れ～ひな人形・押絵～
  2月20日(木)～4月8日(火)

秋田の先覚記念室（2F）

- 石井露月
  ～子規に見出された医師俳人～
  9月21日(土)～11月24日(日)

菅江真澄資料センター（1F）

- 地誌《月の出羽路仙北郡》を読む －1期－
  7月27日(土)～9月23日(月祝)
- 地誌《月の出羽路仙北郡》を読む －2期－
  11月30日(土)～令和7年1月26日(日)
- 初学者のための真澄展
  2月8日(土)～3月30日(日)

秋田県立博物館ニュース No.178
2024.3.14発行 / 編集・発行 秋田県立博物館
〒010-0124 秋田県秋田市金足鳥崎字後山 52
TEL：018-873-4121 / FAX：018-873-4123
E-mail：info@akihaku.jp URL：https://www.akihaku.jp/
秋田県立博物館